

大学の名付けのことも

横山 邦治

一

学校法人武田学園が、「可部女子短期大学」を設置したのは、昭和三十七年で二昔前のこと、文学部を創設して「広島文教女子大学」を名乗ったのは、昭和四十一年のことである。この命名の由来を、私と武田学園のかかわりあいとともに記してみよう。

二

「可部女子短期大学」創設の議が出はじめていた昭和三十五・六年頃、私は「広島県可部女子高等学校」の非常勤講師をしていた。「広島県」とあってまぎらわしいが、現在の広島文教女子大学付属高等学校のことである。広島県立可部高等学校の普通科三年生（文科と理科の二クラスあり、私は理科の構成員三十名位の組に在籍していた。）のクラス担任であった武田学千先生（当時、副校長兼務で常石で常石鉄工を経営しておられた。）にお願いして、お母さんである武田ミキ校長・理事長が経営しておられた学校へ、アルバイトとして雇ってもらったのである。当時、私は広島大学大学院の修士課程二年次に在籍していた貧乏学生で、学資の補助のためにアルバイトしたわけ、昭和三十四年からであったと思う。そして博士課程単位取得までの四年間、非常勤講師として週二日ぐらい学校に顔を出していたのである。創設早々の学校で、まだ家庭科しかなくて、国語も主要科目ではなかったので、国語の専任の先

生は広島女専出身の升味という女の先生お一人だけだったように思うが、監督されるということもなく、好き勝手なことばかりさせていたように思う。私の当時の主要目的は、研究をいかに充実させるかということにしかなかったもので、非常勤講師手当でいかに本を購入するかというようなことばかり念頭にあって、教師になろうという意欲もほとんどなく、当然下調べなどした記憶もないし、教師としては失格であつたろうと思うのである。

広島大学の恩師に頼まれて、峯元という初代の教頭先生になられた方の口ききを学千先生にお願ひした記憶があり、恩師たる学千先生につながる御縁で何かとゴソゴソしていたのであろうが、学園の在り様に関与するようになるなど毛頭考えていなかったと思う。当時の広島大学の大学院生の就職先は、せいせい好条件の高等学校にもぐり込めればいい方で、将来の展望など全く開かれていないというのが実情で、いかに当面の研究生生活を維持していくかということだけを考えていたはずであつた。徒食の生活も考えていたかとも思う。

そのような状況の昭和三十六年、博士課程三年次に在学のまま、可部女子短期大学設置準備のために東奔西走するに至る経緯については、明細には思い出せないのが実情である。一介の非常勤講師で三十歳にもならない若僧の私と、武田ミキ学長がどのような話をされたのであろうか。当時の広島では、短期大学として県立の広島女子短期大学の外に女学院、鈴ヶ峯、安田の三私学があつて、それが一種の均衡状態を保ちながら併存しており、短期大学新設の胎動は何かと感じられるものの、具体的に動き始めるといふ状況にはなかつたのである。そのような情況の中で、私学としては最も新参者である武田学園が短期大学を創設するなどいふのはお先走りもいふところで、当時一般には考えられないことであつたと思う。私が私学としての将来展望を持っていたとも考えられないが（私学の在り様などについて真剣に考える立場にはいなかったから）、私の就職口もできると軽口をたたきながら、短期大学設置の夢物語をミキ校長や学千先生に話をしたことがあつたかも知れない。お先走りの私が、今のままでは何時までも後塵を拜

するばかりだから、一年でも他私学より先に短期大学を創ったがよいなど口走ったような気もする。将来展望もないまま、思い付きを軽々しく口にする癖が私にはあるので。そして、その後短期大学設置のことをミキ校長が誰と相談されたかは知らない、恐らく当時の高校の先生とは話し合われたこともないのではないか、神原汽船の神原秀夫社長と当時常石鉄工の経営をしておられて沼隈町の常石に在住だった学千先生に相談されただけではなかったかと思うが、決心されたら一瀉千里、猪突猛進、無から有を生ずる勢いで短期大学の実現のため全力投球を始めた。私はその熱気に巻き込まれたのもあろう、また火付け役という自責の念もあったかも知れないが、研究とは別の興味を持ったのもあったらう、各地短期大学の調査研究、月数回にわたる文部省詣でのための上京、教授陣整備のための全国各地歴訪から始まって、夏休暇中は書類作りのため校内へ宿泊するという変則的生活に没入するに至った。

定期券を買った方が安上がりだと冗談口をたたいた文部省への日参には、宮島号という急行列車が常用で、安芸号という寝台列車を使うことはほとんどなかった。学校への泊り込みは試食室（現在は初教・幼教の美術室の教官室となっている平屋の特別教室の一部）でゴロ寝をし、申請書作りは作法室で行ったが、昼食は定木さんというミキ校長の身辺のお世話をしていた生徒さんが差し入れてくれるソーマンという生活、カリエス完治せざる学長のがんばりは精神力で乗り切るお人なれば神がかり的で不思議でないかも知れないが、肺結核の予後という健康状態の私がかんばれたのは若さ故としか考えられない。独身の身軽さ故でもあったらう。

最初に設置すべき学科は、広島県可部女子専門学校を解体して短期大学に再生するということもあり、学長の専門である被服科ということに論議なく一決した。申請書作りの作業に入ると、全体の統括は学長であるが、主として設置申請書作りの方は私の担当、寄附行為変更の申請書作りの方は学長と大下さん（今は結婚して重間さん、当時学園の事務は一人で担当しておられた有能な独身女性）の担当ということで進めた。寄附行為変更の申請書は、予算書・

決算書・財産目録など大変面倒な仕事が多くて大変だったようであるが、設置申請書の方は学則とカリキュラムと先生集めが中心で、畑違いの被服科の授業課目の設定に少し面喰う点もないではなかったが、あまり苦勞はなかったという感じさえある。将来計画などいうのもあったが、そういうのは例の開放題の私の作文で、まあ言ってみれば私は作文係りでもあった。

先生集めの方は、被服専門の教授資格所有者が全国的に少なく、その方面では学長のお供をして東奔西走したのだったけれど、非常勤講師などは地元の広島大学の先生方のご協力以案外簡単にでき上がった感じであった。今考えると、三十歳前の大学院生たる私を信用されたのではなくて、時に付き添って紹介くださった恩師真下三郎先生のご威光のおかげかも知れなかったけれど、とにかく四苦八苦という感じではなかった。すらすらとできて、むしろ楽しかったという記憶さえある。被服構成と調理実習で実際に働いてくださる人は広島大学福山分校家政科の方から採用するについて、一人で面接めいたものに出かけたこともあるが、噴飯ものではあったらうと思う。ともあれ、開学後の目途もついて、申請書作成作業も着々と進捗、学校名については、広島県可部女子専門学校の再生ということで、

「広島県可部女子短期大学」と一議なく決定、この年から普通科を併設することにした高等学校を「広島県可部女子短期大学付属高等学校」とすることとした。短期大学を創るのだから高校に普通科併設すべしと主張して、そのカリキュラムまで作成した記憶があるが、その校名についてあまり論議した記憶はない。学校名の重要性などについては深く考えなかったのかとも思うが、諸般の事情で安古市町に開設せざるを得なかった学校名を「広島県可部女子専門学校」と命名されたミキ校長の意志——安佐郡の中心地可部の地に学校を設置したいという——が、そのまま素直に表明された学校名ということで論議の対象とならなかったのだと思う。

かくして「広島県可部女子短期大学」と「広島県可部女子短期大学付属高等学校」という学校名として、申請書は

作成されていった。

三

申請書を一山かかえて文部省へ持参したのは九月下旬であつたらうか。ミキ校長と二人で上京したように記憶している。これはミキ校長のいつもの方法なのだが、申請書最終提出の前にその内容を係官に点検してもらつていた時（その係官が誰だつたか思い出せないけれど、寄附行為変更の方でなく設置申請の係りの方だつたように思う）、「広島県」と学校名にあるのは公立校とまぎらわしいので取り除くようにとの指摘を受けた。それまで十数回にのぼる上京で、申請書の隅々まで加除訂正の指導を受けていたのだが、学校名についての注意は一度も受けていなかったのに驚いてしまい、「広島県立」とはしていないので公立とまちがえられることはない、従来の校名に「広島県」と付けていて広島県から認可されているので問題とならないのではないかなど少々抗弁したけれど、「可部女子短期大学」にしたら簡明でいいではないですかとあっさりいわれてしまい、受け付けてもらえないでも困るので、止むを得ず学校名を訂正することにした。

学校名を訂正するといつても、申請書の学校名記載箇所を全て訂正しなくてはならないのだから、そう簡単なことではない。早速に宿舎（学長の親里の神原汽船の寮、当時は新宿の若松町とかいうところにあつたように記憶している。）へ帰り、当該箇所の加除訂正である。私は例の拙速主義で「広島県」を墨で消して訂正印を押せばいいといつただけけれども、学長は例の完璧主義を發揮して鈇と糊で訂正箇所を全て切り貼りしてしまうことを主張され、とうとう夜おそくまでその作業をすることとなった。申請書の正副控えなどの外に添付書類まで切り貼りを終わり、設置申請書の表紙となつて二人とも困惑してしまつた。「広島県可部女子短期大学設置申請書」と阿部善五郎という当時の学園の書道の先生に書いていただいた立派な字の書き替えをどうするかということである。「可部女子短期大学設

置申請書”とするのに、切り貼りは変だし、訂正印も変である。表題を書いて貼り変えればいいのであるが、天下に著名なる悪筆の私ではもちろん駄目、学長も阿部先生の字を見て後込みされるという状態。ここで私が名案を思い付いたのである。近所で代書屋の看板を見かけたので、明朝そこで書いてもらおうというのである。この名案に二人ともほっとして、その夜は安眠した次第である。

さて翌朝、申請書提出の最終日、場末という感じの民家の並んだ一軒、仕舞屋といっている感じの軒先に代書屋と書いてある家に入り、表題用の白紙を出して“代書”をお願いしたのである。相当の年配の渋紙色の顔色をした老人が、くたびれた和服姿で座机の前に正座していたが、げげんそうな顔をしてまじまじと私の顔を見ながら、そんなことを私はしたことがないという。私は懸命に、私どもは字が下手だから代書をお願いしたいのだと口説く。しばらく押し問答した結果、根負けした老人はしぶしぶ硯箱をあけて墨をすり始めた。ほっと安心して見守る私どもの前で、私はこんな字は苦手なんだとぶつぶつ小言をいいながら“可部女子短期大学設置申請書”と書き始めた。苦手とはいえ“代書屋さん”なのだからと期待していると、いかにも独特の字体で、決して上手とはいえない字を書き始めた。むしろ拙い字である、慣れていて統一されているけれど、一の字を書く時に両端に妙な力が入るボクボクした感じの拙い字である。学長も私も一寸啞然とした感じ、がそれを顔色に出すわけにはいかない、必要枚数を書いてもらって、厚くお礼を申し上げて店を出る。この“代書”料をいくら支払ったか記憶にないが、大した代金を支払ったのではなかったと思う。

“代書屋”さんに対する私の理解がまちがっていたのである。代書屋というのは、登記その他法律的手続きを素人にかわって行う商売なのであって、字の下手な人間の“代書”をすることでいいのである。それを、私は字義通りに思い込んでいたのである。いくら世間知らずの私とて、〇〇工務店とか××司法事務所とか△△登記事務所など

とあればまちがうはずもなかったのだが、古色蒼然たる仕舞屋風の家の「代書屋」という看板を見て、つい字義通りに書の代行をしてくれる商売と理解してしまったのである。代書屋さんが、こんな字を書いたことないとないつぶやいたのは、まこと当然のことであつたのである。

ともあれ、この代書屋さんに書いてもらった字を見ながら、こんなことなら私が丁寧に書いた方がよかつたとブツブツいわれる学長をマアマアとなだめながら（実は私もそう思いながら、今更引込みがつかず）、文部省の守衛の控え室で表紙貼りの作業をし、ともかく申請書を提出して受け付けてもらったのである。昭和三十六年九月末日のことである。

こうした手工業的で前近代的な工程を経た申請書であつたが、教育方針の独自性は保持しながら、形式的には文部省の意向をくみとつて完璧を期する学長の意が充分反映したものとなり、文部省のお役人の評判はよかつたらしく、その後数年にわたつて文部省で聞いたからと全国各地の短大設置希望の学校法人代表者が訪問され、申請書を見ていかれたものである。

あれやこれやで、「可部女子短期大学」が発足したのである。

四

四十名定員で被服科を発足させたのであるが、PR不足の心配がありながら五十一名の学生が集まつてくれた。しかし付属高校からの進学はあまり期待できる状況に至らず、学生募集の前途は楽観できなかつた。発足の年には安芸地方の高校を分校に至るまで歴訪、最初は学長と一緒に挨拶がわりに訪問したのだけれど、次年度からは学長に学生募集で学校訪問してもらうのはあさましいというので、私の一手販売という形になつたかと思う。二年次には備後地方も含めて県内各地の高校を訪問し、島根県・山口県へと足を伸ばした。小川登先生、伊東亮三先生（現広島大学教

育学部教授)、高木敬雄先生(現広島修道大学教授)などには、本学にご赴任いただくと同時に、手分けして学校訪問していただいた。しかし四国地方にしても九州地方にしても、私が最初の瀬踏みをして歩いたようなことで、昭和四十一年に一時広島大学文学部に転出するまでに一応の高校訪問は終えていたと思う。学千先生が沼隈町常石で経営しておられた常石鉄工の従業員である井上さんという人や法人の事務官だった永井寛昭(故人)さんに、ポンコツ自動車運転していただきながら、舗装などほとんど完成していなかった島根県や四国地方を巡回したことを思い出す。山口県の道路事情だけは昔からよかったけれど、岸・佐藤の二代の首相のおかげかなと思つたことである。池田首相の余沢はなかったのか、広島県の道路事情はいつまでも悪かつたと思う、高度成長を招来させた池田首相は角衆流とは違う手法の政治家だったのだろう。

閑話休題、この学校訪問で一番困つたこと、それは「可部女子短期大学」という校名の説明であつた。広島市周辺から呉市やら西条町にかけて、更に石見街道筋と出雲街道筋の高校では、「可部」という地名が判つていて、あの「可部」にある短大かとすぐ判つてもらえなければ——もつともこの判り方には、「可部」という山奥の町にあるという余計な付属物が付くことが多くて、少々困ることもあつたけれど——呉を越えて忠海や竹原の高校に行くと一寸縁遠くなり、備後地方に入ると全く他国という感じで、まず「可部」の立地条件——広島から可部線で三十分位で着く便利などところにある町という具合に——から説明しなくてはならない。西の方も、大竹の辺で段々縁遠くなり、岩国から西では全く地名として知られていないのである。島根でも山口でも、また四国地方にしても、主として広島大学の同窓生として尚志会の名簿を頼りにして訪問して回つた。多くは広島高師の先輩方が多く、この人々は「可部」の地名をよくご存知なのだが、あの太田川下りの拠点たる「可部」の町という戦前の記憶で話となるので、あの川下りをした町ということになって、山奥の田舎町という印象で理解されてしまい、女子の短期大学としてはマイナスの

イメージにしかならないのである。

広島大学の福山分校で採用の面接をした女性と瓢箪から駒が出て結婚することになってしまったのだが、当時、福山分校の付属高校の校長をしていた義父が、盆正月の里帰りに婿どんとして参上する度に、「普遍性の乏しい校名はマイナス・イメージしか与えないので変更しなさい。広島市に近いのだから『広島』という名の付く校名にしなさい。」と繰り返しいわれたし、学生募集に廻ってくださっていた先生方の間にも、あれこれ校名変更の話が出始めている。しかし学長には可部という地名に対する執着と共に、教育は絶対であって校名などに左右されるべきでなく、真剣に教育をしていれば校名に関係なく世人の理解を得るはずだという信念もあり、生半可なことで校名を変更すべきでないことも当然のことで、そう簡単に看板を掛け替えるわけにもいかなかった。

四年制の大学を設置しようという考えが脳裏をかすめたのはいつ頃のことか、私にもよく判らないが、この学校に奉職するのなら四年制の大学にしたいという思いは早くからあったようで、先輩知友には駄法螺とは思えないほど早くから言っていたと証言する人もいる。被服科を創設後、学長の理想に従って（例の将来計画には、学長と相談の上とはいえ大風呂敷ひろげてあったのだが、律気な学長がそれを懸命に実現されたという面もあった。）食物栄養科の栄養士養成コースと教員免許取得を目的とする食物コースを増設、国文科・英文科と息つく間もない勢いで学科増設しながら、学生募集に苦労している実態を熟知している内部の先生方には、夢物語としか感じられなかったようである。極楽とんぼの私とて、四年制の大学を創ったところで学生が充分集まるとは考えていなかったが、後れて来た短期大学の悲哀を時に味わっていた私は、大学を創ることによって、いつまでも高校的尾氈骨を有する短期大学をより大学らしい短期大学へ脱皮できるのではないかという思惑も持っていたように思う。

人一倍上昇志向が強く、実行力の権化のような学長は、四年制大学創設のことを決意されるや、猪武者のごとくに

その目標達成のために全力を集中され、夢物語と周囲に笑われていたことの実現に努められた。四年制大学実現のためにはいろいろな条件を満たさなくてはならないのだが、財政基盤の確立と教授陣容の整備が必須条件で、一番困難な前者については、学長が神原秀夫理事と当時まだ常石で実業に従事しておられた学干先生とに相談して準備されたようで、実務に全くうとい私は、教授陣容整備のことにのみ没頭した。と同時に、四年制大学創設時ならよろしいだろうという学長の同意を得て、学校名のことについても真剣に検討した。

校名変更の目玉は、「広島」という名称を入れるということ、「広島女子大学」とするのが一番いいのであるが、私も設立準備をしている時に、広島女子短期大学が昇格を果して、もはや無理な話である。とすれば、女子大学であることは変わらないので、「広島」と「女子大学」の間に適当な呼称を入れなくてはならないのである。抽象的で倫理的な呼称を入れる案、例えてみれば「修道」「純真」「文化」「淑徳」といった既存のものを含めて、あれこれあり得た。また少し教育的具体性を帯びた呼称を入れる案、例えてみれば「学芸」「文理」「教育」などというものもあり得たという具合に、思考は試行錯誤をくり返した。

― 当時在职しておられた若い先生方二、三人によりより相談したと思うのだが、具体的に思い出せるのは、伊東亮三先生との話し合いである。伊東先生自身、熱心に学校訪問をしてくださっていたので、「可部」という呼称のイメージのなさを痛感しておられ、殊の外に校名変更に興味を示しておられたのである。教官室がなくて、教室を四等分して研究室にあてていた頃とて、どこでこんな話をしたのであろうか。廊下の立話など含んで、よりより話し合っていたのだと思う。そのために、特別な会議を開くというようなことではなかったのである。といって、不熱心で投げやりというのではなく、常時思考はそこを廻っていたのであった。

抽象的な呼称は早くから脱落していて、私どもの間では「文理」「教育」「学芸」「文芸」などという言葉が飛びか

っていた。そうした中から、ポロツと「文教」という呼び名が飛び出したのである。それが誰の口から出て来たのか、最初は伊東先生の口から飛び出したのではなかったか。それに「文教の府」という言葉もあると応じたような気がするけれども、この間の細かい経緯は記憶していない。「文教」という案もあるということ、早速学長に報告したけれど、全く聞きなれない呼び名であったので、名案と皆が飛び付くというのではなかった。

「文教、文教」と、何度も口の中で繰り返してみた。「広島文教女子大学、広島文教女子大学」と口の中で繰り返してみる。なかなか語感として落ち着かない。「文教、文教」と唱え、「広島文教女子大学」と繰り返して唱えてみる。学長に対しても、「文学」と「教育」が合体しており、「文教の府」という言葉もあって、本学の教育理念を十全に表現しており、学長の教育至上主義の生活態度ともよく適応していると説明しながら、実は自分自身を懸命に説得している按配である。しかし、あの場この場で繰り返し反復している間に、「文教」という名称が落ち着いて来る感じがあり、違和感がなくなってきた、最終的に学長が決断を下し、文部省へ「広島文教女子大学設置申請書」として提出することとなり、各種の書類を整えることとなったのである。この時は、安達事務局長、西沢教務課長という練達の事務官がおられたので、学長と大下さんは寄附行為変更の書類作りで苦労されたが、私という素人事務官は免職であちこちへウロウロ走り回っての作文係りだけで済んだ次第であった。

いずれにせよ、かくして「可部女子短期大学」は、「広島文教女子大学短期大学部」として再生し、付属高校も「広島文教女子大学付属高等学校」と改称することとなったのである。昭和四十一年四月のことである。

「可部」から脱皮して「広島」となったのである。参院選の地方区から全国区になったような感じで、「文教」というのは付け足した感じであったのだけれど、荒野であった上原地区に鉄筋四階建ての校舎を建設し（荒野に忽然と出現した白亜の殿堂という感じであったのだが）、正門に阿部善五郎先生の揮毫になる「広島文教女子大学」の門標

が掲げられると、全体がしっくりと落ち着いて、本学に極めてふさわしい名称のように思われてくるのも不思議なことであった。

五

数年経った。国文学科の第三回生が東海道を行脚した時、各人のリュックサックに「広島文教女子大学」と書いた白布を巻き付けて歩いた。その時、道行く人たちが、どんな大学かとげんな顔をして見ていたけれど、当時左程に見なれない名称であったのである。その頃、東京から学長に面会に来られた大学当局者があった。今度再発足する大学の名称を「文教大学」としたい、文部省で本学の了承を得るようにといわれたので参上したとの口上であった。小尾扁男という東京都の教育長をしておられた人が、立正女子大学の学長として就任するについて、自分が理想とする大学の名前として「文教」という言葉が最もふさわしいといっているという話なのである。

本学では、「文教」という名称を専売特許として特許庁に登録しているわけではなかったので、どうぞお使いくださいと答える外ないのである。そして、東京に「文教大学」が誕生した。

更に数年後、京都の方にも「文教」と名称を付した女子短大があると聞いた。これは、家元の方に許可を求められなかった。「文教」という名乗りが独立して、一人歩きを始めたのである。

そうこうする内に、学生募集で各地を回っていると、お宅は文教大学の outlet ですかといった質問を受けることがあるようになった。ズバリと「文教大学」とあるのに対し、「広島文教女子大学」とあれば、なんとなく亜流の感じを与えるからであろう。当方が家元でありますと看板を掲げるわけにもいかず、本学が先にできたのですと苦笑する外ないのである。そして、家元は家元らしい教育が実現されている大学として、世に認めてもらえるように努めなくてはならないと、秘かに思うことであった。

付 言

昭和四十五年に、短期大学部の中に幼児教育学科を増設した。幼児数の急増があつて、幼稚園教諭の社会的需要が増加するのは必至の情況にあつたので、増設に踏み切つたのである。文部省に申請の際、幼稚園の増設というのが条件としてあり、昭和四十六年に付属幼稚園を開園した。教育実習のためにも必要であつたのである。

学長を含めて私どもは全く幼稚園のことに不知案内であつたので、その頃はもう常石の事業を弟の健司君に任せて学校に帰っておられた武田学千先生とも相談して、高校時代の同級生であつた土屋孝子さんに幼稚園のことを全面的に任せるとし、幼稚園の設計の細部に至るまで相談したり、人事までお願いして島田さんという若い人を連れて来てもらつたりして、開園にこぎ付けることができた。

幼稚園の立地については、当時キ学長が校舎設計について常に相談しておられた上野技師の発案で、現在地が提案された。前庭に幼稚園という案にはだいぶ学長が難色を示されたが、当時は広漠とした荒地という感じさえあつた前庭であつてみれば、私どもにもしっくりこない点があつても、上野技師の前庭有効利用という案を否定するほどの名案も浮かばず、現在地と決定した。大学の中にある幼稚園である。教育実習のための幼稚園である。幼稚園立地の違和感を和らげる気持ちもあつたであろうし、本来の付属幼稚園の機能がかくあるべしと考へたのもあつたろう、幼稚園の命名の時、「広島文教女子大学附属幼稚園」とは誰も異議なく賛成であつたが、それに「幼児教育研究施設」と付記することを強く主張して、門柱の標札の中にそのように表記していただいた。この付記が、名実ともに幼稚園の実体となることを願っているのであるが、果たしていかがであらうか。TV放送などが盛んに本学園幼稚園の教育成果を報告してくれているのだが、なお一層園児の教育の徹底と共に、先生方の研究成果がどしどし発表されることを望むものである。

(補注)

『文教』の語は、中国では『尚書』に、「五百里綏服、三百里揆文教」、二百里奮武衛」と見えて、『史記』『漢書』などにはほぼ同文あり、『礼楽法度を以て民俗を教化すること』の意に用いている。日本では、『続日本紀』に「己丑（和銅五年九月）。太政官議奏曰。建國辟疆。武功所貴。設官撫民。文教所崇。」とあるのが古い例のようで、意味するところは中国の場合とほぼ同様のようである。まずは、由緒正しき語なのである。

(広島文教女子大学教授・武田学園理事)